

初期中世における政治的コミュニケーションと書簡⁽¹⁾

マルタン・グラヴェル（内川勇太訳）

【解題】

以下に訳出される論考は、マルタン・グラヴェル（Martin Gravel）博士が2019年3月9日に武蔵大学で行った同タイトルの講演を元に行っている。カナダ・モントリオール出身のグラヴェル博士は2010年、モントリオール大学並びにパリ第1大学（パンテオン・ソルボンヌ）で博士号を取得した（ダブル・ディグリー）。その後はフランスを拠点に研究・教育に従事しており、2012年からはパリ第8大学（サン＝ドニ）の准教授を務めている。博士論文を基にした主著 *Distances, rencontres, communications. Réaliser l'empire sous Charlemagne et Louis le Pieux* (Turnhout, 2012)（『隔たり、接触、コミュニケーション。シャルルマーニュおよびルイ敬虔帝の下での帝国の実現』）に顕著なように、現在にいたるまでのグラヴェル博士の主要な研究関心はカロリング期の政治史をコミュニケーションという観点から読み解くことにある。とりわけ空間を隔てた長距離コミュニケーションの実践様態の分析に力を注いでいるが、その際、コミュニケーション・メディアの一つとして博士が注目しているのが書簡であり、いくつかの個別論考を公刊している。本稿は博士のそうした関心と研究実績に基づいて執筆されている。なお博士は歴史学以前に音楽学を専攻しており、そうした背景が、書簡を「楽譜」に例えるような比喻表現に現れているようにも思われる。

グラヴェル博士の招聘は、高橋一樹教授（武蔵大学）が代表を務める研究プロジェクト「中世の書簡体文書による統治実践と秩序形成をめぐる日欧比較研究」（JSPS 科研費 JP17H02377）によって行われた。その名が示すとおり、同プロジェクトでは日欧中世の様々な政治体の統治実践・秩序形成の様態を比較するにあたり、書簡体文書を中心としたそれぞれの文書実践のあり方に注目している。その際、文書に記されたテキストや書式のみならず、書体・外形・レイアウト・装飾などの諸要素を含めたモノとしての個々の書簡体文書を、その移動の諸相をも考慮に入れつつ考察することを重視している。この点において同プロジェクトとグラヴェル博士の関心が一致していたため、招聘事業は極めてスムーズに実現された。なお東京大学史料編纂所および国立歴史民俗博物館で行った日本中世書簡原本の閲覧調査はグラヴェル博士に強い印象を残したようで、2019年冬学期からの古文書学セミナーでは早速日本中世の事例も盛り込んだ授業を行なっているとのことである。

来日時の講演に際しては、日本古代・中世史研究者を前に話すことを前提に、カロリング期フランク王国の歴史の概要説明も含め、同時代のコミュニケーション様態や書簡の利用について概説的な説明を盛り込むよう依頼した。本稿でもそうしたテキストの性格は維持され

ており、参考文献指示を含めた註釈も最小限に留めている。それゆえに、この時代あるいはこうした問題群について新たに関心を持つ読者の最初の導きとなろう。もちろん、博士自身の研究に裏打ちされた、専門家にとって有益な示唆を数多く含むことは言うまでもない。

本稿の掲載にあたっては、内川勇太氏（東京大学大学院）に翻訳の労を執っていただいた。この場を借りてお礼申し上げる。（菊地 重仁）

西ヨーロッパにおいて、紀元11世紀以前の書簡で、原本の形で現存するものは非常にまれですが、我々が初期中世ヨーロッパを理解するためには必要不可欠です⁽²⁾。カロリング朝の時代、基本的には西ヨーロッパの歴史における紀元8世紀と9世紀に関して、現存しているそうした原本について議論する際に、この2世紀間がラテン・ヨーロッパ世界の歴史になにがしかの重要性をもっているとすれば、それは一つにはとりわけ書簡を用いることで長距離のコミュニケーションが大規模に行われるようになったことにあるとお示しできれば幸いです。

このことを論証するためには、カロリング期の概要をお話する必要があります。それはしかし、単にこの報告を文脈の中に位置づけるためのものではなく、フランク帝国が長距離コミュニケーション、すなわち書簡にいかに強く依存していたかを示す私の第一の議論となります。カロリング朝の王と皇帝が彼らの時代に特有の政治的な問題に直面し、コミュニケーションを抜け目なく用いることでその大半を解決できたことが示されるでしょう。そうすることで当時の書簡にまつわる物的証拠について議論することが可能となります。こうした文書に政治的実践の視角から取り組むことで、現在進行中の歴史叙述上の議論に新たに寄与したいと思います⁽³⁾。このことは一つの観察と二つの問いにかかっていますが、それらはすべて実に単純なものです。彼らの広大な帝国を統治するため、カロリング期の支配者たちは空間を超えてコミュニケーションをとらなければなりませんでした。彼らはそのために文書を大規模に用いました。それではなぜ現存する書簡はこれほど少ないのでしょうか。また現存する書簡が、質の低く、粗野ですらある形式なのはなぜなのでしょう。以下に掲載した文書は、紛れもなく原本の皇帝書簡です（図1）⁽⁴⁾。

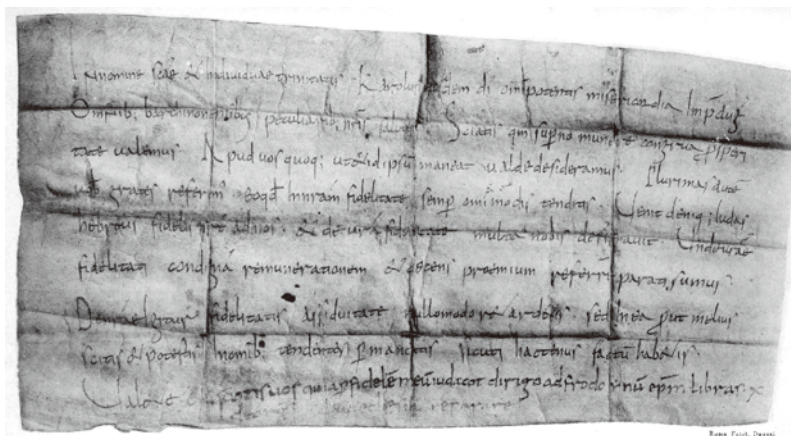


図1：皇帝シャルル禿頭からバルセロナ市民への書簡（876年）

このような簡素な文書が当時の最も強大な君主の一人を代表しているとは奇妙なことではないでしょうか。これこそ私が取り組みたい歴史的問題ですが、それに取り掛かる前に、カロリング期の支配者たちが直面しなければならなかった特有の政治的課題について考えましょう。そのために、話は西方におけるローマ帝国の滅亡までさかのぼる必要があります。

まず思い起こしていただきたいのは、ローマ帝国の文化と諸制度は単純に崩れ去ったわけではないということです。蛮族の侵攻によって西ヨーロッパが先史的な、非文字社会の鉄器時代に後戻りしたわけではありません。多くの研究から交易と商業、あるいは徴税、公共事業、そしてそれに必要な文書作成は停止しなかったことが示されてきました。世の中は変わりましたが、最後の西方皇帝が476年に廃位されたからといって、あるいは半ばローマ化した軍事指導者が権力を握ったからといって、突如として全くの別物になったわけではないのです。政治的統一が終焉を迎えても、ローマ帝国は文化的母体として拡大を続けたとさえいえるでしょう。

書簡によるコミュニケーションに直接関係する側面に着目すると、3つの重要な連続性が際立ちます。第一に、ラテン語自体は旧帝国の領土と住民の母語であり続けました。カロリング期にいたるまでもそれ以降さえも、ラテン語は共通語として用いられ、文書であろうが口頭であろうが長距離コミュニケーションに便利でした。ラテン語は徐々に大陸の北部と東部すなわちスカンディナヴィアとスラヴ人の土地まで広がっていったのです。第二に、キリスト教はほとんどいたるところで繁栄を続けました。制度として、教会は社会のあらゆるレベルにおける結合を維持する助けとなり、その巨大な階層構造は、千年紀をかなり過ぎたのちに強大な世俗国家と都市共同体が発展するまで、主要なコミュニケーションのネットワークでありました。第三に、書簡を書くことは西方において決して止むことはありませんでした。貴顕層と宗教共同体は、男性、時には女性に、書簡の書き方の教育を怠らず、そうした教育を受けた者が当時の政治的行為に従事していたのです。書簡は未だに重要で有用な技術形態とみなされ、実践されていたのです。

そうはいっても、西洋中世の最初の数世紀に、政治的超新星爆発から生まれた小さな星々として、蛮族の王の宮廷が、古代の皇帝の宮廷に取って代わったことは事実です。そのそれぞれは、貴顕の惑星と小惑星からなる縮小した星系の中心になりました。こうした星系、すなわち王国はかつての帝国ほど広大ではありませんでしたが、それぞれの規模で、未だにローマ的であったのです。結局のところ、王たちは自分のことを帝国の最高位の官職保持者とみなしていました。彼らは皇帝権の象徴を当分の間維持し、外交関係上、未だに皇帝が君臨する東方の都コンスタンティノープルに口先だけの敬意を表明していたのです。それぞれの蛮族諸国家内部では、宮廷とのコミュニケーションは、それ以前と同様に重要であり、書簡作成は未だに中心的な政治的行為でした。

6世紀の間に、この諸王国の中で最も強大であるのはフランク王国であることがはっきりとしてきました。クローヴィス王とその子孫たちは現在のフランスよりも広大な、ローマ帝国属州ガリアのほぼ全域の征服を果たします。彼らは当時として最も安定した王朝、すなわちその正統性

が議論の余地のないほど強固となった王家を打ち建てることに成功したのです。彼らはよく知られたように長髪の王でした。彼らの先祖は海の怪物であったと噂されていました。その軍事力の前には、周辺の王国と公領は抗う術を知らませんでした。

メロヴィングの王たちは強力な軍団を率い、そのカリスマは疑いようのないものでしたが、彼らはその広大な王国全体を強大な制度でもって統治する手段も、それどころか意志すら持っていませんでした。彼らの権力の中核は北と西、すなわちロワールとラインという大河の間にありました。南と東では、彼らの権力をもっぱら使者と代理人を通じて、あるいは実際には年貢の支払いであった徴税制度を通じて実感されるものでした。彼らの王国は決してそれほど中央集権的な国家ではなかったのです。そして7世紀中葉から彼らの権力が最終的に衰退してくると、フランク王国の中核に対して周辺に位置する公領は、独立に向けて強力な地方権力を発達させてゆくこととなります。

私たちは、フランク王国の議論の余地ない王朝として、メロヴィング朝の支配者にとって代わることになる一族に生まれた君主たちを「カロリング朝の支配者」と呼ぶことにしましょう。その先祖は何世代にもわたって、フランク王国北東部に影響力を持つ貴顕としてその政治権力を築き上げてゆきました。7世紀末以降には、彼らは徐々にメロヴィング朝の支配者たちから権威を奪ってゆき、751年には彼らの代わりに王となるにいたります。しかし彼らの興隆は、その統一性、領域的範囲、権力の多くをメロヴィング朝のカリスマに負っていたフランク王国の緩やかな衰退と軌を一にしていました。カロリング朝の支配者は王となりましたが、内憂外患に対処しながら彼ら自身の王国を再建しなければなりませんでした。

カロリング朝の興隆は4点に要約できるでしょう。第一に、7世紀中葉からメロヴィング朝の王権が徐々に衰退したことが、最有力の貴顕家系に有利に働きました。第二に、長きにわたる戦争と流血を伴う政争を経て、カロリング家がフランクの貴顕の中で新たな、議論の余地ない指導者として立ち現れました。第三に、カロリング朝の支配者は、かつてフランク王国に忠実であったものの、メロヴィング朝の王の没落を口実としてその制約から逃れようとした周辺諸国家を再征服しなければなりませんでした。第四に、この絶え間ない戦争が、新たな民族、とりわけイタリアのランゴバルド人ですが、他にもライン下流の向こうのザクセン人、ガリア南西部の新たなムスリム諸国家、東方のスラヴ諸民族などへのフランク支配の拡大の前提条件を整えることになりました。817年ごろにフランク人がその権力の絶頂を迎えた時には、その支配下に置かれた土地は、かつてのメロヴィング朝の王の支配下にあった土地の4倍を超えていました。

このすべてを成し遂げることは大いなる難題であり、カロリング朝の支配者は、これを完遂するまでに、714年に没した宮宰ピピンから、814年に没した皇帝シャルルマーニュまで、4世代を要しました。カロリング朝の支配者はこの一世紀間を通じて、フランク人の軍勢を毎年のように、かつてないほど遠方の戦場へと遠征させました。彼らの新しい王としての権威はその軍事的指導者としての成功と、彼らをその戦士たちと結びつける忠誠のネットワークに基づいていました。

彼らによるフランク王国再建は、征服とそれがもたらす戦利品によって可能となったのです。無敗の指導者に見えたことで、カロリング朝の支配者は、古より崇敬されてきたメロヴィング朝に取って代わるために必要なカリスマを勝ち得たのです。彼らは必要に迫られると同時に意図的に軍隊王となったのでした。征服を通じた拡大が彼らの統治を特徴づけています。

しかしながら、カロリング朝の支配者は、クーデターを正当化するために軍事力のみに頼ることはできませんでした。彼らは、メロヴィング朝の支配者たちが決してすることのなかったような仕方教会に対する責任を果たすことで、キリスト教的な王となる必要があったのです。このことに対する彼らの自負は並々ならぬものがあり、彼らは教会改革、教皇選挙、そして神学的議論にいたるまで様々な方面に干渉し始めました。9世紀初頭には、教会の諸問題への活発な関わりによって、彼らは4世紀のコンスタンティヌスやテオドシウスを模範として、皇帝となったのです。

考慮すべき重要な点は、絶え間ない遠征、軍事的征服、忠誠のネットワークの拡大、教会問題の監督、そしてこれらすべてを通じて大陸のラテン的キリスト世界に属するほぼすべての政体を統合したことは、並はずれた規模の難題であったということです。これは文字通りの意味といっ
てよいもので、この帝国はおよそ100万平方キロメートルに広がり、その臣民は何千万にのぼりました。これは5世紀以来、どの西方の国家が統治した土地と人口をも上回るものでした。この文脈において、彼らは新たな目標と理想を掲げるようになりました。その目標を実現しようと努める中で、彼らは他の国家とりわけランゴバルド王国とビザンツ帝国の観察者にして模倣者となったのです。こうして彼らは統治上の問題に関して、革新をもたらす驚くべき力量を持つことになりました。アルファベットの書体、古代のラテン語作家の伝承、そしてローマ教会に関する改革政策について語り始めるときがありません。覚えておいていただきたいことは、彼らが、新たな野望に溢れると同時に、彼らが直面した実際的な問題に即応した独自の思考様式を発展させ、実践したということです。

カロリング朝の最初の支配者たちは、議論の余地ないフランク人の指導者としてメロヴィング朝の支配者に取って代わるため、支配の地理的範囲を拡大するため、西方キリスト教世界の霊的指導者として認められるため、そして国家と教会の組織を強化するために、長距離コミュニケーションに頼らなければなりません。言い方を変えれば、彼らは同時にいたるところに存在することはできず、直接すべてを監督することはできなかったのです。彼らはその権力と責任を幅広い代理人に委ねなければなりませんでした。彼らを統率できなければ、その権力はすぐにも弱体化していたでしょう。彼らの帝国は軍事力の上に打ち建てられましたが、コミュニケーションを通じて維持されなければなりませんでした。この広大な領域でコミュニケーションを実践するうえで彼らが行った様々な新たな試みについてはよく知られています。

彼らの政治的コミュニケーションの企ての中で最もよく痕跡を残しているのは、緩慢で不動ですらあるような、しかし時を越えて持続するようなものでした。例えば、カロリング朝の支配者

は大規模に教会の建造と拡張を援助しました。考古学的調査によって、西ヨーロッパでは大半の教会が、8世紀と9世紀に大幅な改修を経て以前より大きくなったことが明らかになってきています。もちろん、これらは君主権を直接的に表現したものではありませんが、こうした教会のより幅広く、長大な身廊で、ミサに列席した聖職者や修道士や信徒が、こうした拡張に必要な財政的・政治的援助をなした王の記憶を保ち続けたと考えても間違いではないでしょう。結局のところ、これは公共事業と正統な権力の表明を結びつけるという昔ながらのローマ人たちの原則を、キリスト教的、政治的文脈に当てはめたわけです。そしてこの時期には、修道士に加えて修道女までも王国とその支配家系のために祈るようになりました。特定の祭日には、カロリング朝の支配者のためにラウデースと呼ばれる連祷が歌われましたが、この新たな慣行については偉大な歴史学者であるエルンスト・カントロヴィッチによる優れた研究があります⁽⁵⁾。

教会の壁を越えたところでは、新しい王家は、商業と交易のあらゆる機会にその名が目とされ、耳にされる方法までも見つけました。カロリング朝初代のピピン短軀王に始まり、歴代の王は貨幣製造権を掌握しました。おそらく一つには、その保護下に置かれた商業活動の中で信頼に足る貨幣が使用されるように保証する意図があったと思われますが、彼らは当時製造された唯一の通貨であるデナリウス銀貨を政治的なメディアとしても利用したのです。メロヴィング朝末期の国王たちは貨幣製造をあまり重視しませんでした。彼らはこの重要な業務の責任を在地で影響力を持った人々、特に司教や世俗の有力者に委ねましたが、彼らの製造した貨幣は王権の印を欠き、しばしば非常に粗悪なものでした。それが、ピピンが新王家の初代の王になってまもなく、フランク王としての支配権を主張するために、新貨幣を大規模に製造させ、流通させたのです(図2)⁽⁶⁾。

カロリング朝の支配者は、その正統性を強調するために貨幣を利用し続け、その過程でより複雑な意匠を生み出してゆきました。彼らはまた、メロヴィング朝の支配者が一世紀以上前に放棄



図2：ピピン短軀王のデナリウス銀貨（751-768）

した金貨の発行を再開しました。ローマ皇帝と結びつけられていたため、重いソリドゥス金貨を製造すること自体が、相当な政治的表明でした。

もちろん、建造物は不動であり、貨幣はそれほど速く動きません。この政治的コミュニケーションの二つの例は緩慢で散漫でした。これらは個人間および組織間で特定のやり取りを確実にする役目は果たしませんし、果たせません。これらは隔たりを超え、長期に渡って権力を表しますが、短期間の権力の行使に直接的に寄与することはできません。このためには、フランク王たちは多様な代理人に頼っていました。彼らはたとえ間接的であろうと、各地に現前する他者の言動を通じてほとんどいたるところで代理されていたのです。

このことは、一方では伯を中心とする世俗の代表者の体系、他方では司教を中心とする教会のそれという、二つの権力移譲の階梯を単純化し、強化することで実現されました。制度として、教会は王あるいは皇帝の命令と勧告を拡散させる最も重要な手段となりました。それはピラミッドのような、上意下達方式の階層構造として機能し、その4段階あるいは5段階の伝達を経て、君主からのコミュニケーションが社会の最下層まで到達したのです。カロリング朝の支配者が教会の厳格で階層的な秩序に執着した一つの理由は、彼らが効率的なトリクルダウン式の樹木状のコミュニケーション体系を必要としたことに求められるでしょう。聖俗の事柄において階層的秩序は重要な理想であると同時に、必要な手段でもあり、このことはカロリング初期の支配者がカピトゥラリアの形で発した布告のそこかしこに見て取ることができます⁽⁷⁾。

しかし彼らは階層的な権力移譲では不十分であると知っていました。理論上ではなく、実際上の問題として代理人が独立することを許容するのであれば、別の手段を通じてそれを維持する必要がありました。カロリング朝の支配者はこのことを甘受せず、だからこそ信頼や個々人の忠誠という紐帯の維持に注力したのです。彼らがあれほどの責任をその使者であるミッシ・ドミニキの双肩に担わせたのも同様に説明がつきます⁽⁸⁾。そしてそれゆえに、シャルルマーニュは二度も12歳以上のすべての自由人男性からの一般誠実宣誓を求めました。実に彼はこの宣誓を、主君から武装して騎乗する権利を与えられた非自由人にまで拡大したのです。しかしおそらくカロリング朝の支配者にとっての権力移譲の階梯、個人的忠誠、直接的関係性の重要性を評価するには、彼らがいかに集会を頼みにしていたかを考えることが最善でしょう。

カロリング初期の支配者はなによりも軍事的指導者でした。彼らの権力はフランク人の戦士たちに武装させ、毎春彼らを召集し、名声と戦利品を手にする新たな遠征へと進軍するように説得する力に依っていました。もっともこのマルスの野における集会は非常に長い伝統がありますが、カール・マルテル、ピピン短軀、シャルルマーニュといった指導者たちは、軍の召集に実に長けていました。歴史学者として私たちは、どの遠征も複雑で不確実な任務であり、将軍が直面しなければならない最初の大きな課題は、単に武装した男たちを一か所に集めることであったことをつい忘れがちです。ある指導者を支援する必要性を感じない、あるいは不確実な危険を冒したくないならば、戦士たちは家に留まることを望んだでしょう。もし実際に彼らの気が進まず従軍しなかった場合、それは王への服従拒否、あるいは反逆とさえみなされましたが、カロリング

初期の支配者はそれほどこうした問題に直面することはありませんでした。召集命令は伯や司教を通じて、そして貴顕を互いに結びつける忠誠の階梯を中継して伝えられたからです。戦士たちは彼ら自身の在地の指導者に付き従い、王や皇帝に従軍したのです。これは非常に効率的で、ピピン短軀はランゴバルド人の王と戦争するために755年と756年の二年連続で何千キロメートルも行軍することをフランク人たちに認めさせることができました。こうした証拠の重要性はいくら強調しても強調し過ぎるということはありません。

軍事的集会在最も重要であり、それが政治的統合の決定的要因でしたが、カロリング朝の支配者は教会会議も復活させました。約80年の休止を経て、教会会議はカロリング朝初代の王の選出直前に始まり、カールマンとピピン短軀の監督下で開催されました。それはシャルルマーニュ治世には頻繁に、ほとんど毎年開催されるようになり、まず794年にフランクフルト、次いで813年にアーヘンでは普遍的志向を持った会議が開催されるにまでいたりしました。彼は明らかにアルプス以北のラテン教会に責任を持っていると自認していました。こうした教会会議は教会問題の調和的な解決と共に、つまるところ教会そのものにその理想を見出していた帝国の統一性にも寄与すると考えられていました。教会会議は階層構造の中間層や下層にまで広がり、司教は自身の司教区で定期的な教会会議を開催することを期待され、小教区を司る地方司教代理や首席司祭も同様でした。

こうしたことすべては、カロリング朝の支配下で、フランク人の世界がつながっていたのだというおおまかな印象を与えます。もちろん王や皇帝は私たちと同じようなコミュニケーションや移動の手段を持っておらず、有給の役人、郵便制度、碑文を通じた大々的な法文の公開などのローマ帝国と同程度の制度や社会基盤も持っていませんでしたが、彼らは教会建築、祈祷、貨幣、決定の伝達の中に、そしてほとんどの場合彼らの名において行為する代理人を通じて存在することができたのです。なによりもまず、カロリング帝国は制度的機能によっては部分的にしか規定されていない個人の紐帯に依っていたのです。フランク人の軍勢の指導者として、諸民族の統一者として、教会の守護者として、最上位の裁判官にして立法者として、皇帝は象徴や機関である前に、関係性のネットワークの中心に位置する結節点でした。私たちがヨーロッパの言語で‘emperor’と呼び習わす、例えば日本の天皇や中国の皇帝のような、世界の他の地域の君主は性質を異にしているように思われます。彼らの宗教的、象徴的、制度的重要性が、彼らを高次の領域に据えている一方で、カロリング朝の皇帝は「司令官」や「将軍」を意味するインペラトルとして地上に留まっていたましたが、それはその権威が軍隊による選出に、それゆえ軍隊と共に戦へと進軍する力に由来していたからです。彼らはみな、ローマ史上究極のカリスマを持つ軍事的独裁官ユリウス・カエサルの後継者なのです。

もし私たちがカロリング帝権を個人の関係性とネットワークの上に築かれたものと考えたならば、これまでに挙げたコミュニケーション手段ではそれを維持するには足りない想定しても構わないでしょう。村の共同体はたしかに直接的な交渉、責任の委任、象徴の共有、時折の集会によって維持されるでしょう。これは、大国家には不可能であり、戦術的重要性を持つ多くの状況

で、これまで見てきた緩慢で、散漫で、不定期の伝達手段では不十分です。時には、コミュニケーションは迅速で、直接的で、明確であるべきなのです。ここで、書簡とそれを託された使者の出番です。

事実、書簡はカロリング期の長距離コミュニケーションの最も顕著な痕跡です。9世紀に限っても、書簡のやり取りへの非常に簡潔で間接的な言及から、それが授受されたそのままの形で伝来している文書まで、多様な保存状態の書簡史料が数千点残されています。この数千通の書簡は氷山の一角に過ぎないと考えてよいでしょう。というのもそれらを読むと、全体として西ヨーロッパ世界を越えた膨大な書簡のやり取りが記録されているからです。例えば、イタリアに住んでいたカロリング朝の王女がバグダッドのアッバース朝の支配者アル＝ムクタフィー（902-908年）に宛てた書簡が知られています。それは翻訳され、大幅に改変されたうえで、カリフによって授受された外交上の贈与を記録した年代記に挿入されています。私たちがこの書簡に関して持っているものは、15世紀の写本に残された改変済みのアラブ語版のみです⁽⁹⁾。この貴重な文書の存在を私たちが知っていることは幸運なことですが、この文書が今にいたるまでに通ってきた苦難の道のりゆえに、文面もモノとしてもその元の姿を確認することはできません。実に書簡史料の大半においてこうした難題が付きまといます。私たちはかなりの量のカロリング期の書簡を知っていますが、それはそれらが送り手によって草稿として、あるいは受け取り後に名宛人によって複写されたからです。私たちがこうした書簡を通じた長距離の政治的コミュニケーションの実践について推測しようことの大半は、この実践の真正で直接的な証言とは必ずしもみなせない写しに依拠しているのです。というのも複写することはしばしば改変や偽造さえも意味するからです。

こうした難しさは、書簡史料の大半が書簡集に所収されていることに明らかに起因します。書簡集の多くは書簡作者の生前あるいは死後まもなく編纂されたものなので、それ自体は貴重な史料です。多くの場合その使用は個人的で地域的なものであり、書き写されることはまれで、大半は原本のみが残されています。その見事な実例が、著名な作家であるエインハルドゥスの書簡を記録している折丁で、これは9世紀末にヘントからランに移され、のちにフランス国立図書館に保管されている写本に縫い付けられたものです⁽¹⁰⁾。歴史学者はこうした書簡集から素晴らしい情報を見つけてきましたが、どれも特定の組織あるいは個人によって授受された全書簡の完全な記録簿ではないということを肝に銘じる必要があります。彼らは選択的で、収録順は特定の必要に即したものであり、縮約や修正も厭わないからです。また書簡集が中世の書簡を研究する者を魅了するあまり、そこから漏れた書簡には十分な関心が払われてこなかったとさえいえるでしょう。これは今に伝わる数少ない真正な書簡原本について当てはまりますが（ありがたいことに、マーク・メルジオヴスキーのような文書形式学者がこうした状況を変えてきました）、中世の書簡集以外に書き写された書簡についても同様です。

こうした散在している書簡は、有名な書簡集以外の書簡のやり取りの研究を可能とするため、

測り知れない価値を持っています。例えば、書簡集に焦点を当てた研究は、9世紀の偉大な聖書解釈学者ラバヌス・マウルスが書簡によるコミュニケーションのネットワークに占める中心的位置を過小評価してきたといえます。彼の書簡で現存するものはあちこちで書き写される形で散在していますが、重要なことは9世紀の第2四半世紀には、現存するすべての書簡作者の中で、彼が最も多作であったことです⁽¹¹⁾。彼の書簡はアルプス以北の帝国各地で書き写され、明らかに書簡の模範とみなされるとともに、それ自体が重要な文章だと考えられていました。ラバヌスは彼のかつての師であり、多くの書簡集が残っているアルクインの跡を継ぎ、書簡によるコミュニケーションの発展に寄与した人物です。書簡集以外の書簡の研究は、星々を見るために月のない夜を待つようなものといえるでしょう。こうした散在している書簡の中に考慮すべき重要な文書史料が隠れているのです。

こうした書簡を総体として見ることで、私たちは政治的コミュニケーションの働きを理解することができます。そこから明らかになるのは、宮廷が書簡のやり取りの主要な結節点であったということです。それは宮廷で作成され、宮廷へ送られた書簡が、書簡史料全体の高い割合を占めていることから明らかです。9世紀前半に限っても、500通以上の散在している書簡が残っています。この中で、およそ半数は、皇帝、王、皇妃、王妃、有力な妾が関わっていました。集団として、彼らは司教や極めて有力な大修道院長と並んで重要であり、ローマ教皇より重要であったとさえ思われます。散在している書簡は、書簡集の枠外にあるものを可視化してくれますが、そうして観察可能となったものは、別の角度からも確認することができます。

例えば、カロリング期において活発に書簡執筆がなされたことは書式集を紐解くことでも評価することができます。これらは多様な文書類型を、教育と実践のための模範として集成したものです。書式集が9世紀と10世紀に増加したことは、そこに含まれる書式の多くが書簡の雛形であったため、書簡のネットワークの密度と複雑さを示していると解釈してもよいでしょう。そうした書式は実際の書簡から、しばしばその形式上の特性ゆえに筆写されたものであるか、あるいは日々のコミュニケーションに用いられる類型を代表しているために書き写されたものです。雛形として、書簡原本に記された個人名、日付、具体的な処置に関する記述はしばしば削られました。例のごとく、今日まで伝わる書式集の大半は教会の文書局か修道院の写字室の産物です。従って、司教や大修道院長にとって有用な雛形ばかり所収される傾向にあります。この史料から図示すると、書記が仕えている権威者を中心に描かれることになります。しかし、この主要な中心に加えて、たいていの場合王の宮廷が第2の枢軸となります。王とその役人とのやり取りが重要であったことは明らかです。

当時実践されていた書簡作成の技術それ自体が、宮廷との書簡によるコミュニケーションの重要性を物語っています。〔訳者註：盛期中世以降に執筆された*ars dictandi*と呼ばれる書簡作法指南のような〕書簡作成に関する理論的論考はまれですが、雛形としての書式そのものが、王とその代理人宛の書簡には如才なさや書簡特有の修辞法を正確に用いる必要があったことを示唆しています。とりわけ、こうした名宛人に対しては確実に適切な挨拶から書き始める必要があります。

た。この冒頭の挨拶文句の問題は書簡作成者を悩ませたようで、もちろん文通相手が自身より高位であればあるほど、その作業はより危険を伴うことになりました。王宛書簡の書式がほとんどの書式集に含まれていたことはこれで説明がつきますし、それは宮廷に対してあるいは宮廷から送られる書簡が当時の長距離コミュニケーションのネットワークの中心であったという大きな議論にも合致します。こうした状況下で、真正の書簡原本が、貴重な文書として保管されただろうと想定したくなるでしょう。知られている限り、書簡は最も丈夫で耐久性のある筆写支持体である羊皮紙に書かれたので、書簡が私たちの手元に到達する前に朽ち果てたとは考えられません。なおこれは、時の経過に耐えられなかったため、8世紀以前にパピュルスに書かれた書簡のほとんどがたどった運命だったと思われます。

しかし実際は、歴史学者は、私たちがこうした原本をほとんどもっていないという事実に向き合わざるをえません。現在に伝わる真正原本の書簡は、知られている書簡史料の1%に満たないのです。残りは複写、書式、部分的引用、言及などです。これは、現存する国王証書史料において真正原本の国王証書がずっと大きな割合を占めていることを考えると、奇妙なことです。例えば、ルイ敬虔帝の皇帝証書の22%は原本として残っています。しかしこの比較が、両者の差異を説明してくれます。国王証書はその決定が永続するという体裁で、証明力のある文書として保管されることを前提に作成されます。その物質性はそのことをよく物語っています。国王証書は大きく、複雑で、精密に調整された文書でした。明らかに国王証書は見せるために作られ、必要が生じれば再び見せるために保管されたのです。他方で書簡は、それが極めて権力のある人物から送られたものであっても、簡素なものでした。実際簡素であったので、羊皮紙片のように簡単に持ち運ぶことができました。

上記の皇帝書簡（図1）は、876年に皇帝シャルル禿頭からバルセロナの住民に送られたものです。大聖堂文書館に収蔵されているため、この書簡が意図したとおりに届けられたことはたしかです。そしてまた都市を代表してこの書簡を受け取った高位高官の一人であったに違いない司教が保管するほど重要視されていたのでしょう。後世には私たちが知りうる限りいかなる再利用もされていません。さて、この小さく地味な書簡が、争いの続く国境地帯の重要な都市に宛てて強力な君主が送った書簡に期待されるものとは程遠いのは奇妙なことです。イエス・キリストによって書かれ、天上から地上へと送られた書簡にまつわる当時の噂を真に受けるのであれば、この書簡よりも高い次元の長距離コミュニケーションを想定することは難しいでしょう。

それではこのシャルル禿頭の書簡をモノとして見てみましょう。幅30cmほどのその大きさは片面に文章を収めるに足るものでしかありません。書体はやや急いで書かれた書物体で、省略記号を多用し、行取りは不規則です。間近で見なくとも、ラテン語の文面を読むことすらしなくても、長方形の文書の中に目立った要素がなにもないことはすぐにわかります。日付条項も、署名も、印章も、その他の権威と真正性を示す印もないのです。これは当時の社会のより下位の人物によってやり取りされた書簡の形式に実によく合致します。他にも「長い」9世紀のカロリング

朝君主の名において書かれた同様の書簡がいくつか現存しているので、シャルル禿頭の書簡が例外だったと考えることはできません。このことは核心的な問題につながります。すなわちなぜカロリング朝の文書局はこのような簡素な書簡を作成したのでしょうか。

この問いの難しさを理解するためには、文書局長が古代ローマ帝国の伝統に従って、美麗で複雑な文書を作成することができた点を強調することが重要です。この両極端な文書類の関係性を理解するために、「書簡」と訳されるエピストラというラテン語がしばしば両類型〔訳者註：証書と書簡のこと〕を指す際に用いられたということを知っておくとよいでしょう。当時の人々が書簡とはなにかについて融通の利く考えを持っていたことは明らかです。それは一人称の送り主から二人称の受取人に対して宛てられなければなりません。それはまた挨拶に始まり挨拶に終わる全体的な論証の枠組みに即していなければなりません。ですから、もしその作成に責任を持つ文書局長が両文書類型をおおよそ同じ種類のもので捉えており、なおかつ作成の際に多様な視覚上の、あるいは文字に関する複雑な手段を講じることができたのであれば、非常に簡潔な形式の書簡を作成したことは意図的な選択の結果であると考えなければいけません。すなわち文書局長は文書形式上の視覚的なあの手の手を講じる必要はないと判断したのです。言い換えれば、シャルル禿頭がバルセロナの住民に宛てた書簡がこのような形式であるのは、文書局の技巧が稚拙であり、書記たちが無能であったからではなく、意図的にそうしたのです。たしかに皇帝がこのような書き物の欠片によって表象されていたと考えるのは難しいですが、この書簡はこのままの形で実際にその目的を果たしたのです。

このような対照性は、当時の他の偉大なキリスト教的権力者の書簡を眺めると、より理解するのが難しくなります。ローマ教皇とビザンツ皇帝はともに、長大なパピュルスの巻物に文章を記す古来の伝統を維持していました。それらは扱いにくく、読むことさえ難しいほどの大きさでした。現在まで原本の形で伝わる最古の教皇書簡 *bulla* は、855年に教皇ベネディクトゥス3世が送付したものです⁽¹²⁾。巻物全体は長さ約7メートルにも及ぶので、完全に広げることを想定されていたはずはありません。その幅と高さはその場に居合わせたどんな人間よりも大きいものでした。その大きさは文章の長さに起因するものではなかったため、視覚的仕掛けだったのは明確です。文字は巨大で、字配りと行取りはとても広いものでした。カロリング期の支配者はそうした書簡が教皇から彼らの帝国中に、特に宮廷に送られていることを知っていましたし、宮廷にはコンスタンティノープルからも同様の書簡が届いていました。こうした書簡を受け取った時には非常に強い印象を抱いたと思われますが、カロリング期の支配者は、その大きさと全体的な見かけに比べれば二次的である諸側面を除いて、この形式を模倣することはありませんでした。彼らは、ともにエピストラと呼ばれる極めて形式的な国王証書と非常に簡潔な書簡の両類型を包含する、彼ら自身の伝統で満足していたようです。

国王証書と書簡の違いは想定されるほど厳密ではなく、そのことが問題を一層ややこしくしています。多くの国王証書はより単純な形式で書かれていましたし、書簡の中には国王証書の手法を取り入れたものもありました。この893年ごろにアルノルフ王から王国の伯と指導的人物に送

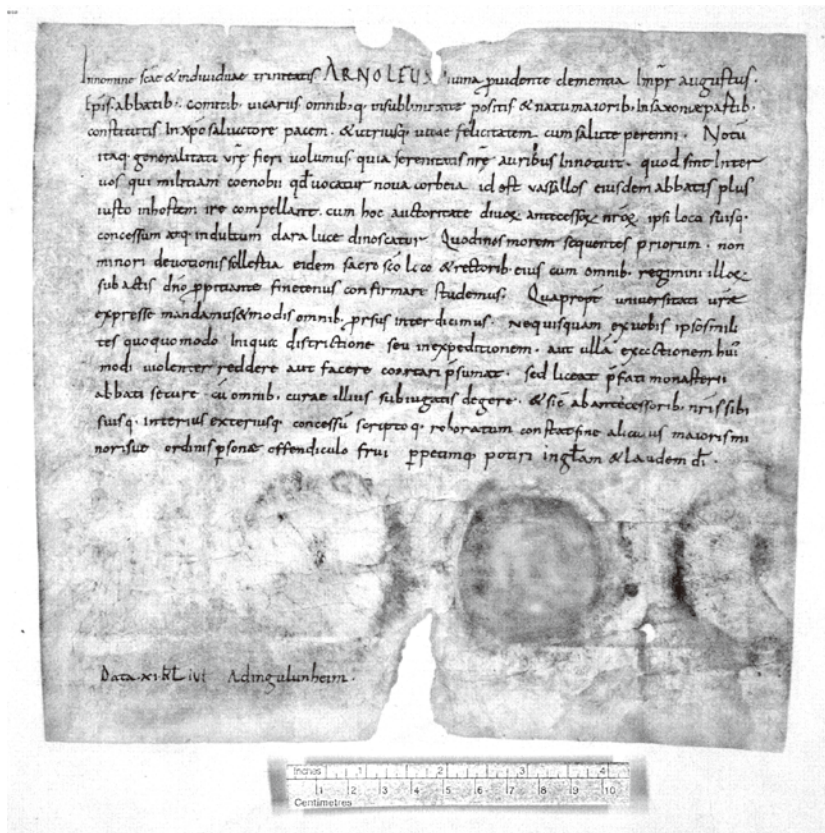


図3：アルノルフ王が伯らに宛てた書簡（893年頃）

られた書簡は後者の好例です（図3）⁽¹³⁾。

特に印章に広い領域が割り当てられている底部において、広い余白が目を行っています。さらに、最初の行の王の名前が、引き伸ばされた小さな大文字で書かれているために目につきます。最後に、折りたたみ方が書簡の通常形式とは異なっています。大半の証書と同様に、縦に右から左へと折りたたむことで、印章を羊皮紙の層で保護しているのです。これはどう見ても書簡本文書ですが、モノとしてはシャルル禿頭からバルセロナの住民に宛てた書簡と全く異なり、視覚的なメッセージを伝えることが期待されていました。そしてこれは珍しい事例ではなく、2年後に作成されて送られた、ほとんど同じレイアウトを持ち、同じような形式で作成されたアルノルフの書簡が残っています⁽¹⁴⁾。

さて、こうした比較を通して、私たちの問いは未だに答えを得られていません。なぜカロリング朝の文書局は時として、バルセロナの住民に宛てたシャルルの書簡のような簡素な書簡を作成したのでしょうか。彼らはすぐれて視覚的な要素をもった他の書簡作成の伝統を知っていました。彼らは複雑な視覚的産物である国王証書を作成し、こうした国王証書作成の伝統を実際に書簡作成時にも流用したのです。それではなぜ常にそうしなかったのでしょうか。これまでに見てきたシャルル禿頭の書簡は、孤立した事例ではないということを強調したいと思います。それは

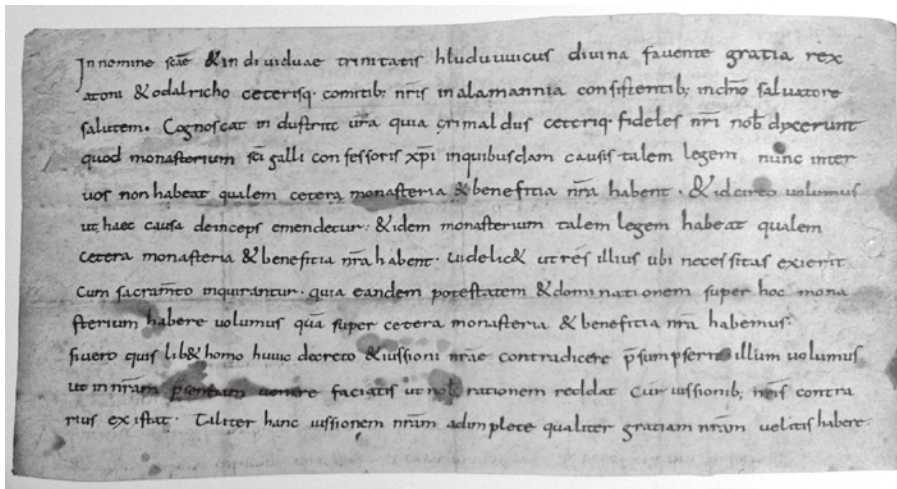


図4：ルードヴィヒ「ドイツ人」王のアレマンニアの伯たち宛書簡（854-855年）

例外でもなんらかの変則的な事例でもなかったのです。わずかに現存する9世紀の君主の書簡原本の中には、最小限主義の原則に固執し、送り主が持つ上位の権威を示す視覚的特徴を欠いているものがいくつかあります。シャルルの異母兄弟であるルードヴィヒ「ドイツ人」王がアレマンニアの伯たちに宛てたこの書簡も同様の事例です（図4）⁽¹⁵⁾。

それゆえ、なぜそのような簡素な書簡が送られたのかという問いは、私たちの考察対象が変則的な文書だったからであるとして棄却することはできません。というのも、私たちが判断する限り、変則的な文書ではなかったからです。

簡素な書簡の作成は資源の節約のためであるという考えは当然捨てることができます。たしかに文書局が筆写支持体として通常用いていたと考えられる羊皮紙は、特に最高級のものは高くついたのでしょう。そうはいっても、私たちは王や皇帝の文書局の話をしているのです。仔牛の命を助けることが彼らにとって優先事項であったと考えることは、とりわけ君主の権力を表現し、実現するための役割を担った書簡の送付の話となると非常に困難です。また書記が時間を節約したと考えるのも無理があります。皇帝の書簡が持つ視覚的効果は、宮廷の書記が骨折るには値しなかったと考えていいものなのでしょうか。そして結局のところ、印章と広い余白を持つアルノルフの伯たち宛の書簡は、シャルルのバルセロナの住民に宛てた書簡よりもそれほど多くの労力を費やしてはいないはずです。さらに当時の書簡文化において、より多くの時間と資源を用いることなく書簡の視覚的効果を高める他の手段も知られていました。従って、なぜ特定の皇帝あるいは王の書簡ではそうした方法が用いられていないのかという問いは依然として残ります。

原則的には、ハルトムート・ホフマンが中世の書簡に関して1964年に重要な論文を公にして以来、答えは知られています⁽¹⁶⁾。おそらくマーシャル・マクルーハンの著作『グーテンベルクの銀河系』（1962年）が出版されて間もなく世界的に知られるようになった有名な格言、「メディ

「アはメッセージである」に着想を得て、ホフマンは中世の書簡において、最も重要なものは伝令であると述べました。この重要な考え方がそれ以来論駁されことはありません。それは基本的に、長距離コミュニケーションにおいて書簡は二次的な役割しか果たしていないことを示唆していると捉えられています。書簡の運び手が送り主を代表するよう期待されていたのです。彼は常にある種の使節であり、議論し、交渉することができました。また彼には受取人の反応をうかがいながら質問に答え、彼が話すべきことについて説明するために記憶を利用できるという際立った利点を持っていました。要するに、伝令は話し合うことができたが、書簡は繰り返し読まれることで、内容を反復することしかできなかったのです。ホフマンの提案はカロリング朝の支配者の置かれた状況を説明するのに極めて適切なものでした。というのも彼らは広大な国家を統治せねばならず、権力中枢から辺境まで旅するには数週間から数か月かかったからです。書簡をあちこちとやり取りすることで、書面を用いて迅速にコミュニケーションをとることは不可能でした。当時は伝書鳩も、馬と乗り手を中継してゆく郵便制度もなかったのです。それゆえすべての書簡の運び手はその主君の能動的な代表者でした。書簡が伝令を運んだのであり、その逆ではなかったといっても過言ではありませんでした。というのも、書簡はしばしば伝令をミックスすなわち使節として表現している一方、その文面は、シャルルのバルセロナの住民に宛てた書簡にしてもルードヴィヒ「ドイツ人」王の伯に宛てた命令書にしても、伝令によって記憶できないような情報はなかったからです。

もちろん、カロリング朝の支配者は非常に長大な勧告や多様な論文を作成するために書簡体文書を利用する術を知っていました。写本の中には非常に長い書簡も含まれており、これらはとても複雑な構成をしていたため、きっと伝令は書簡にも頼らなければならなかったでしょう。ですから、こうした状況下では、書簡は運び手以上とはいいいませんが、運び手同様に重要だったのです。しかし私たちはこうした長大な書簡を複写からしか知りません。原本は存在しないため、そのモノとしての実態は謎に包まれています。そうした書簡はおそらく複数のページからなる折丁や長い巻物として送られたのでしょう。いずれにせよ、こうした文書は私たちの調査の枠外にあり、こうした文書が存在したことを認めたところで、私たちが直面している、なぜすべての皇帝の書簡が際立って視覚的な物体として作成されたわけではないのかという問いが変わることはありません。

地味な四角い羊皮紙でも、皇帝によって発行され、高位の人物によって担われれば、なにがしかの視覚的効果を持ちうると考えることはできます。加えて、こうした書簡は国の最高権威から送られてくるので、その簡素な外見が、それを受け取ったものは誰であろうとも、皇帝あるいは王との関係でいえば、自らが従属者であるということを認めなければならないという事実を強調しえます。彼らの主君は、一般的に家士、下級役人、従者に命じる際に用いるような形式で彼らに書簡を書き送ることができたのです。書簡による命令書がモノとしても書面としても簡素でありえることは事実です。送り主は、たとえ礼儀正しさを示す場合であっても、これにこだわることはありませんでした。こうした例として、上述の大修道院長エインハルドゥスから、その領地

の一つの管理者に送られた命令書を考えてみましょう。

キリストの御名において、エインハルドゥスから所領管理人某へ
我々が汝に行動するように命じたことがそのままとなったように、すべてが変わらないという事態がありえたことに、我々は大いに驚いている。我々は、穀粒や麦酒を作るために供されるべく汝がムリンハイムに送るべきであった穀物について、汝がなんの措置も講じなかったことを聞いた。(汝が送ったものといえバ) 30頭の豚、それも良質ではなく並みのものと豆3袋に過ぎない。加えて、この冬を通じて我々は、汝あるいは汝の動向を知らせる使者を目にしていない。もし汝が送ってきているもの以上の利益を我々がフリッツラーから得られないのであれば、我々がこの禄を維持すべき理由はないだろう。さあ、もし汝が我々からの恩恵について少しでも考えが及ぶのであれば、我々は汝が己の懈怠を正し、すぐにでも我々が汝から受け取れるであろうものを知らせることを請う⁽¹⁷⁾。

従順でない部下に呼びかける時には、書簡はそのうわべの飾りをすっかり取り去ることもあるのです。そこにはなんの挨拶文句もありませんし、送り主は自身に複数形を用いる一方、受取人には単数形を用いています。説得したり懐柔したりしようとするなんの努力も見られず、直接的な命令と非難するような皮肉があるばかりです。エインハルドゥスがしたように、皇帝もその忠臣に呼びかけるとき、とりわけ書簡の運び手は彼を代表しているのですから、彼らが遅滞なく彼に従うことを期待できないことがあったでしょうか。国王証書に用いられる視覚的な手法がそのような書簡からは締め出されているだろうと考えることは理にかなっていないでしょうか。たしかにもっともに聞こえますが、それでも私たちが考えてきた証拠を説明し切るに十分ではありません。本稿が提示する仮説は、この点においてなんとかして旧来の学説から離れようとしています。

最も簡素な原本が置かれた文脈を考えてみましょう。私たちはフランクの権力中枢からはるか遠くに位置する重要な都市に対して送られた書簡や、地方において最も有力な貴顕の一員であるアレマンニアの伯に送られた書簡を見てきました。カロリング朝の支配者が貴顕や教会の最上位の役職者を無遠慮に扱うことはめったにありませんでした。それどころか、彼らの権力はこうした者たちの忠誠に基づいていたのです。彼らと敵対することは反乱につながる可能性があり、時として実際に反乱が起きました。結局のところ、この2通の書簡の文面はエインハルドゥスのフリッツラーの管理者宛の書簡ほど厳格には聞こえません。たしかに送り主の声は力強いですが、敬意を欠くと受け取られたはずはありません。事実、君主がそのような態度でその臣下に語りかける書簡は現存するなかのごくごく一部に過ぎません。原本として伝わるものではなく、送付先で書き写したくなるようなものでもなかったのでしょう。

全体として、こうした簡素な書簡が、なんらそれを示すようなものがなくとも、なにがしかの視覚的効果を有している、あるいはその簡素な外見は送り主との関係において君主の地位を表現

していると考えても、満足な説明にはなっていません。歴史学者が権力の儀礼の舞台演出に関して行った研究が提示したように、より良い説明があると考えたいところです⁽¹⁸⁾。彼らの議論の詳細や、巻き起こした反響には立ち入りません。彼らが「儀礼」という概念を多用し過ぎており、現存する儀礼の描写におそらく信を置き過ぎているとしても、君主とその代理人たちの重要な行為は、その場に居合わせ証人となった者たちに正しい印象を与えるために演出されていたと強調したのは正しかったでしょう。政治にとって最も大切なことは正統性であり、それゆえこうした出来事から生まれる便りや噂は非常に重要でした。こうした便りや噂の大部分は証人たち、そしてそれらを国中に伝える人々によって作られたのです。このことが政治の肝心な一側面でした。

このことを踏まえると、君主の代理人と接見することは、どこで起ころうとも重要な局地的事件だったと想定することは理にかなっているでしょう。もしそうしたコミュニケーションの最も重要な側面は伝令自身の働きであるというホフマン主義に同意するのであれば、この伝令にはやり取りのある時点で、文字通りその主君を議論の場に呼び出すことを保証する手段が与えられていると考えられないでしょうか。要するに、私たちが見てきた書簡は音声録音装置に似た機能を持っていたといえるかもしれません。それは担い手によって用いられるもので、受取人が読んだり、代読させたりするために引き渡されるものではなく、担い手自身によって受取人とその同席者に読み上げるためのものであったのでしょう。王が視覚的に現前するためではなく、王に声を与えるために作られた道具として、国王証書の形式をまねる必要はありませんでした。視覚的に目立つものはなんであれ、こうした書簡が聴覚に訴えかけることを阻害したとさえ考えられるでしょう。それは音の世界に対して作られたもので、その機能においてもつばら、自分自身より高位の権威に能動的に働きかける使節である伝令のための道具だったのです。いうまでもありませんが、彼が主君の言葉を復唱するとき、間違いを犯すことはできませんでした。どんなにささいな間違いでも誤解につながり、その任務全体が悪く言われることになりえたのです。だからこそうした書簡は短く、巧みに作られ、しかし文面は簡潔で曖昧な言葉遣いや使用頻度の少ない単語を用いることなく、容易に読み上げられるように表現されました。それは舞台演出の一部であり、それによって王が肉体的にではなく、伝令の声を通して現前しているという印象を作り出すことを期待されていましたが、そのためには伝令は文字が読めなければなりませんでした。

もちろん、長距離コミュニケーションはまた視覚的、物質的な援助も必要としました。最も簡潔な書簡が伝令によって読み上げられるために作成され、そのようなものとして、いかなる記録文書としての機能も有してなかったという可能性は、贈与や国王証書といった他のコミュニケーション手段を併用することを妨げはしません。それどころか、君主を代表する伝令が、君主をたとえ間接的にでも、視覚的、聴覚的、時には触覚的な舞台演出を用いて、身体的に現前させる責任を持ったがゆえに、任務遂行のために万全の準備を整えていたと考えるのが自然です。ごく簡素な書簡は彼らの道具箱の中で、特別な役割を持っていました。国王証書は携帯可能な碑文のごとく、皆の目に触れることを想定されていました。他方で書簡は皆の耳に届くよう読まれることを念頭に、その頁は読み上げる伝令のほうを向いていたのです。そうした書簡は、楽譜と同様、

視覚的な関心を引くことは想定されていません。それゆえにわずかしが原本として残っていないといえます。書簡に文書として保管する価値がそれほどなかったことはすでに知っていました。しかし、書簡の中で最も簡潔なものは、それが受け取られた時でさえモノとしては重要ではなかった、という可能性について私たちは十分に考えてこなかったのです。

結論を述べましょう。新王朝として、西方における帝権の刷新者として、カロリング朝の支配者は非常に困難なコミュニケーション上の課題に直面しました。ピピン短軀、シャルルマーニュ、ルイ敬虔とその後継者たちは断片化した政治世界を一つに統合しなければなりませんでした。彼らの権力の実態は多様な地域の貴顕と教会の官職者に、君主を信頼し、参与し、服従するように説き伏せる能力に依っていました。カロリング朝の権威と称号は、結局のところ、他の偉大なゲルマン王権の伝統と比較すれば新しいものだったのです。政治的コミュニケーションは彼らの要でした。というのも彼らが支配した土地はフランク人の王国の従来の境界をはるかに超えるものだったからです。彼らはイタリアではランゴバルド人の貴顕に、スペイン北部ではカタルーニャの辺境領の諸都市に、服属したかつてのアヴァール帝国の将軍たちに、さらには危険な隣人であるフランク人との関係が不安定であったデーン人、スラヴ人、ブルターニュ人に対処しなければならなかったからです。

こうした困難な境遇の中で、カロリング初期の支配者たちは当時知られていたあらゆる代理とコミュニケーションの手段の利用に力を注ぎ、しばしばそれらを用いる新しい手法を見出しました。その主導によって、カピトゥラリア、教会会議決議、国王証書、書簡、公式の歴史叙述などの膨大な史料が現在に伝わることになりました。その中では、大規模な集会、著名なミッシ・ドミニキ、新法の制定、そして教会の階層構造を強化するためのカロリング朝の支配者の努力などが語られています。これらすべては政治的コミュニケーションの成果であると考えられます。

このコミュニケーションの道具箱の中で、書簡作成は重要であり、実際カロリング朝の権力の最盛期には、宮廷との書簡のやり取りは非常に密なものでした。宮廷によって用いられた多様なコミュニケーション手段の中で、最も簡素で地味な書簡に特別な役割が与えられていたのです。それは稚拙に急いで作られたのでもなければ、過小評価され、無視されうるものとして扱われたわけでもありません。それは君主の声の運び手として、その視覚的側面に無用な関心が集まらないように作成されたのでした。それは楽譜だったのです。

注

- (1) 本稿は2019年3月9日、武蔵大学において、高橋一樹教授主催のセミナーで発表されたものである。高橋教授には、古い時代の書簡への関心を共有する日本の研究者たちとの貴重な意見交換の機会を与えていただき感謝の念に堪えない。同様に、本稿の英語原版を忍耐強く、かつ正確に翻訳してくれた内川勇太氏にも感謝の意を表す。またとりわけ私の友人であり同僚の菊地重仁准教授、ならびに私を温かく迎え入れ、示唆に富む見解を述べていただいたセミナーの参加者の方々、特に丹下栄教授と津田拓郎准教授にも深く感謝申し上げる。

- (2) A. Petrucci, G. Ammannati, A. Mastruzzo, E. Stagni (dir.), *Lettere originali del Medioevo latino (VII-XI sec.)*. Pisa, 2004-2012.
- (3) この研究分野の主導者による最近の論文は、M. Mersowsky, “Früh- und hochmittelalterliche Briefe. Ein Überblick,” in P. Rückert (dir.), *Briefe aus dem Spätmittelalter. Herrschaftliche Korrespondenz im deutschen Südwesten*, Stuttgart, 2015, pp. 9-31 である。
- (4) J. Calmette, “Une lettre close originale de Charles le Chauve”, *Mélanges d'archéologie et d'histoire*, 22 (1902), pp. 136-139, pl. IV-V.
- (5) E. H. Kantorowicz, *Laudes regiae. A Study in Liturgical Acclamations and Medieval Ruler Worship*, Berkeley / Los Angeles, 1946.
- (6) M. Gravel, *Distances, rencontres, communications. Réaliser l'Empire sous Charlemagne et Louis le Pieux*. Turnhout, 2012, p. 115.
- (7) Gravel, *Distances, rencontres, communications...*, pp. 200-223.
- (8) Sh. Kikuchi, *Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)*, Wiesbaden, forthcoming.
- (9) G. Gandino, “Aspirare al regno: Berta di Toscana,” in C. La Rocca (dir.), *Agire da donna. Modelli e pratiche di rappresentazione (secoli VI-X)*, Turnhout, 2007, pp. 252-258.
- (10) Paris, BnF, ms. lat. 11379.
- (11) M. Gravel, “Les lettres des autres. Correspondances et réseaux en filigrane des grandes collections carolingiennes”, *Le Moyen Âge*, forthcoming.
- (12) C. Brunel, *Bulle sur papyrus de Benoît III pour l'abbaye de Corbie (855)*, Paris / Amiens, 1912.
- (13) Th. Sickel and H. Sybel, *Kaiserurkunden in Abbildungen*, Berlin, 1891, vol. I, pl. 7b.
- (14) P. Kehr (edit.), *Die Urkunden der Karolinger III. Die Urkunden Arnolfs*, Berlin, 1940, pp. 163-164, 235-236.
- (15) A. Bruckner (edit.), *Diplomata Karolinorum. Faksimile-Ausgabe der in der Schweiz liegenden originalen Karolingerdiplome*, Basel, 1969-1974, vol. IV, pl. 98.
- (16) H. Hoffmann, “Zur mittelalterlichen Brieftechnik,” in K. Repgen and S. Skalweit (dir.), *Spiegel der Geschichte: Festgabe für Max Braubach zum 10. April 1964*, Münster, 1964, pp. 141-170. M. McLuhan, *The Gutenberg Galaxy. The Making of Typographic Man*, Toronto, 1962.
- (17) ラテン語原文については K. Hampe (edit.), *Einharti epistolae*, in *MGH. Epistolae Karolini aevi III*, Berlin, 1899, p. 113 (no. 9) を参照。
- (18) この分野においてはハーガン・ケラーやゲルト・アルトホーフの研究に多くを負っている。最近の主要な研究としては、Koziol, *The Politics of Memory and Identity in Carolingian Royal Diplomas: the West Frankish Kingdom (840-987)*, Turnhout, 2012 がある。